

## なぜカラ岳陸上案ではダメなのか その2

長谷川 均（国土館大学文学部地理学教室）

あえて脈絡もなく、陳腐なことを書くことから始めたい。

新石垣空港建設に関わる様々な問題は、すでに二十年以上も続いている。マスコミの対応も随分かわってきた。制作会社が「カラ岳陸上案」をニュース番組に持ち込んでも「また白保か」とか「白保ネタはもういいよ」と古参の担当からはねられる一方で、環境担当記者の中には新石垣空港建設の何が問題になってきたのかを知らない方も多いということもあるようだ。

そんななか、新空港を作りたい人たちは現空港を「滑走路の短い危険な空港」といい、その滑走路は延長されないままである。事故が起これば、新空港建設反対運動に責任を転嫁するだろうけれど、オーバーラン事故以降、現状を変えずに放置している行政の責任は大きい。

先ごろにぎにぎしくオープンした、沖縄県ご自慢の「沖縄デジタルアーカイブ」では、白保サンゴ礁は「天然記念物」になっている（2003年8月中旬現在）。Webページをつくった人も、チェックした県の人でも「白保サンゴ礁は天然記念物」に何の疑問も持たなかったらしい。白保サンゴ礁は、市町村指定の天然記念物にさえなっていない。「開発は自然破壊の原動力」という看板が立っていたこともある現地では、白保サンゴ礁などは厄介者なのだから。

これまでも、白保を国指定の天然記念物にしようという動きは旧環境省あたりにはあったし、たぶんまだ生きている話だとおもう。しかし、陸域の無秩序な開発は、この地域の自然を台無しにしているし、いっそうその動きは加速している。とても、国の天然記念物や世界遺産になどという悠長な話しではない。

### <だいじょうぶ>

カラ岳陸上案には自然保護、環境保全の立場から多くの問題が指摘され続け、行政はこれらに何もこたえないまま「だいじょうぶ」でやり過ごそうとしている。

推進派も反対派も、新空港建設に関心を持つ多くの人には「ほとんど根拠のないだいじょうぶ」でことが進んでいることを認識しているはずだ。赤土の流出もだいじょうぶ、サンゴ礁への影響もだいじょうぶ、ウミガメやコウモリの問題だってだいじょうぶ。

地元の報道を追えば、「自然保護を唱えることでカラ岳陸上案を潰そうと思っているのは、御上のやることに何でも反対したがる狂信的な自然保護団体とその支援者で、建設に疑義を唱えておられた国会議員の先生方も、おおかたは建設に理解をしめしてくださいました」というようなことが書いてある。世論操作でもしているつもりなのか。

カラ岳陸上案の「アセスメント方法書」には、余計なことがたくさん載っているが肝心なことはあまり書かれていない。方法書については、島津康男さん（環境アセスメント学会会長、名古屋大学名誉教授）が指摘しているが、「工事中・供用後ごと、

心配の度合い別に、もっとも心配されるのは、ある程度心配されるのは、余り影響がないのは のように、わかりやすく記載すべきだ」というふうにはなっていない。日本各地の、問題の多い多くの案件で闘いぬいた「アセスの専門会社」がまとめてくれているのであろうアセスメントによれば、ほとんどの心配事が「だいじょうぶ」で片づけられることになるはずだ。

#### < 建設後に出る影響 >

「なぜカラ岳陸上案ではダメなのか」と聞かれれば、多くの研究者はサンゴ礁生態系に取り返しのつかないダメージを与えることになるとこたえるだろう。その理由を、サンゴ礁浅海域が陸域の影響を受けやすいきわめて脆弱な生態系であること、石灰岩台地の地下水系からもたらされる様々な影響をうけて、現在の白保サンゴ礁の生態系が成り立っているであろうこと、など事細かに列挙するだろう。盛土をとる土取場やゴルフ場の代替地で新しく二次、三次の環境破壊もおこる。ウミガメや貴重種のコウモリは産卵や生息の場そのものが無くなってしまう。ある意味で研究者より経験の豊富な海人（うみんちゅう）は、もっと直接的な表現で問題点を指摘してくれるかもしれない。

しかし、これらの懸念や問題点も「空港を造って、何年も経たなければ顕在化しない」ということが多いとおもう。このような書き方をすると、県がアセスで示すであろうシミュレーションに比べ実務者からは非科学的で使えないと言われるだろう。大規模な開発だけに原因があるかどうか判らないではないかという反論もあるだろう。ただ、多くの人を抱えている懸念は、世界各地での事例研究という、その背後にいるたくさんの研究者たちの「経験則」からきていることを忘れてはならない。

そのような問題は心配ないというのであれば、計画を推進する側の人たちは心配ない実例を示してもらわなければならない。良好なサンゴ礁生態系をもつサンゴ礁の近傍の石灰岩台地で、赤土を流さない大規模な工事というものはかつてあったか、サンゴ礁生態系を損なわない開発がかつてあったか。赤土防止工事で赤土を流している石垣島では、ほとんど説得力はない。

シミュレーションでは、空港ができればこのような影響が出るだろうと予想するわけだが、前に述べた懸念は経験則からの予想だからはずれるかもしれない。しかし、経験則というのは、コンピュータシミュレーションより当てになることも多い。シミュレーションそのものも、経験則をもとに様々な条件下でどのような挙動がみられるかを予測するものであるから、予測的に放り込む「経験」や「実測値」が少なければ、当然予測値も当てはずれなものになる。海上案のアセスで、白保には南向きの顕著な潮流はなくアオサンゴ域に濁水は到達しないとしたシミュレーションが、限られた観測に基づく、とんだ見当ハズレだった一方で、サンゴ礁の微地形判読や簡単な仕掛けで測定した調査結果から、南向きの大きな潮流が存在すると指摘していたボランティア研究者や、経験的に知っていた海人の言うとおりだった。

新空港予定地は、石灰岩台地特有の非常に複雑な地下水系を持っている。このような場所で大規模な人工改変が行われた場合、サンゴ礁へ流れ込んでいる地下水がどの

ようにかわってしまうのか、正確に予測するのはきわめて困難だ。シミュレーションは、実に様々な手法が開発されているのでそれらを応用すればよい。結果に責任の持てないシミュレーションは簡単に出来る。シミュレーションを行うためには、地下水系の正確な把握が前提となるが、それ自体が難しい。何本かのボーリングを掘って判るほど単純ではない。

#### < 景観を守らなくていいのか >

生態系の心配ばかりが話題になるが、景観上の問題も大きい。カラ岳陸上案では、南側は台地を削り、北側は低い土地に盛土をして全体として平坦な滑走路を造ることになっている。北東端は海岸線に近いところまで延びる。海岸から見上げると、数階建てのビルに相当する高さの巨大な土手が出来ることになっている。こう書いてもあまり実感出来ないだろうが、同様の滑走路は日本の各地でみることが出来る。筆者は最近、中国地方の山間にある飛行場でこのような例をみた。市街地へ向かうために空港からバスに乗り、取り付け道路を下りながら滑走路を回り込んだ時に見上げた巨大な土手をみて思わず「すごいなあ」。

空港建設後の景観上の大きな問題を、美しいコンピュータグラフィックでごまかすのは簡単である。実際にできたものを見れば、その巨大さ醜悪さに息をのみ、こんなはずじゃなかったということになるだろう。人によっては、よくもこんなすばらしいものを石垣島につくってくれてありがたい ということにもなるが。

観光で食っていこうとする石垣島にとって、新石垣空港建設に伴うイメージダウンは大きい。貴重な観光資源を失うことにもなる。全国的な規模で「環境評価」(環境の価値を明らかにする方法で、様々な手法が考案され政策に活用されている)をやれば、間違いなくカラ岳には作れなくなるだろう。行政の金を使って、ぜひ客観的な調査をしてくれる機関に依頼してほしい。行政がやらなければ、カンパを募ってやってみるという方法もある。

ところで、石垣島は年間何人ぐらいの観光客を受け入れることができるのだろうか。空港建設後、野放図に観光客を受け入れても、ゴミや廃棄物の処理、汚水、電力などの対策やビジョンは何もないのではないか。現在でさえ、海岸林や原野、はては鍾乳洞にまで投げ込まれるゴミの山、海に垂れ流される生活排水や家畜の糞尿、宝の島はいつまで持ちこたえられるのか。

しかし、これらのほとんどは「だいじょうぶ」ということでウヤムヤニにされるだろう。行政は、新空港によって住民が被るデメリットを説明していないのだから。

#### < 最後に >

「エーネーナラヌ」は、計画されている新空港建設に反対する人たちの機関誌と思われる。ただ、このメンバーの多くはコチコチの自然保護論者ではないだろう。オトナだから、地域経済に公共事業は必要だということも知っている。メンバーの多くは、石垣島の人たちがどうしても新空港がほしいというのであれば造ればよいと思っているのだと思う。つくる理由、つくる場所、その決め方に異議があるのだ。空港を

造る金は石垣島の人たちが供出するのではない。大部分はよそ者の税金で造るのである。

「沖縄県だけに自然保護を押し付けるのは、観光でしか行ったことのない人のエゴだ」「観光ですてきな思い出がしてくれるのは、地元の人たちの絶え間ない努力のおかげです。その人たちのためにも、生活があり、新空港が必要なのです」。数年前、元市長の孫だという大学生の投書が全国紙に載ったことがある。その人たちの子や孫のために「新石垣空港が必要か、必要ならどこに造るべきかをきちんと考えよう」というのは、よそ者の余計なお節介だと映っているのだろう。

島の自然や自然史に対する教育の欠如が、若い人にこのような発言をさせてしまうのではないかというのは考えすぎだろうか。よそ者が島のためにできることのヒントも、このあたりにあるような気がするのだけれど。